様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：２５３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５３１５４

研究課題名（和文）障害者の優れた能力の検証とその組込を可能にする社会構築パラダイムに関する研究

研究課題名（英文）The Process in Building Various Excellent Abilities of Disabled Persons and Taking them into the Society for Prosperous Future

研究代表者
田内　雅規（Tauchi, Masaki）

岡山県立大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：００００７５４２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀後半から今世紀にかけ，高度福祉社会が実現しつつある．これはグローバルな広がりとなっているが，我が国は先進諸国に比して障害者の社会へのインクルージョンに関して遅れを取っている．本研究では情報障害や移動障害のために社会的不利が大きく，またその障害特性のために提供される職業機会などからも除外されることの多い視覚障害者を対象とした．視覚障害者に対する聴き取り調査等から，視覚障害者の優れた能力とその形成過程を検討し，発達の可能性と支援のあり方を示し，今後の共生社会形成への課題と展望について検討した．その結果，家族支援と社会支援，コミュニティ支援の各要素の存在とバランスの重要性が指摘された．

研究成果の概要（英文）：Advanced welfare society is being realized through the second half of the 20th century and this century. Although this is a global spread, there is delay in our country about the inclusion of disabled persons to the society as compared with advanced countries. In this study, we chose visually impaired persons who tend to have severe information and mobility problem as a target. Because of these disadvantages of visually impaired, they are often excluded from chances given to disabled people. We investigated the experience of visually impaired persons that might be related to acquire their excellent physical and mental abilities by interview. This has been done in purpose of obtaining an idea to construct a schema to include them into our society smoothly. As a result of this study, it was found that a variety of assistance provided by family, government and community are evenly important and it was also found that harmony and balance of the assistance play an important role.

研究分野：a社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：障害者　視覚障害者　能力　社会　パラダイム

１．研究開始当初の背景

障害者は時に驚くべき身体能力（運動、感覚、認知）を発揮することが知られている。今回の主対象である視覚障害者には、エコロケーションや点字触読などの残存感覚発達があり、また肢体不自由者においては代替身体部位の巧緻性の発達、自閉症者に見られる高度な技能発達など枚挙に暇がない。その幾つかは学術的な検討もなされている。更に、この様な生理学・運動学的能力ばかりでなく、定量化の難しい発想、思考、記憶、企画などの高次脳機能面や芸術的才能において顕著な力を発揮する例も紹介されている。しかし、その様な優れた能力を、同定していない生育環境における種々の環境要因と本人の特別な能力等が相俟って生じた一部の障害者においてのみ見られる偶然の産物と捉える傾向もあり、遡及して解明することは困難とする見方も多い。障害の様相は多岐に亘っているため、系統的な検討が極めて難しいのも事実である。

そのため、現在まで個別障害者が果たして本来発揮できるはずの能力を発達させるのに必要十分な環境で成育したのか、また成人後の日常環境においても継続的発達を促す環境にあるか否かを評価する手法は存在しないといっても過言ではない。一部の障害者の伝記、自伝等の資料によって一定の推測は可能であっても、系統的に深く追究するには質量共にデータが不十分な状況である。近年、障害学研究が勃興しているものの、それは未だ、障害の捉え方に視座を置いているものが多い現状である。

申請者は過去、利用者に対して低負荷で機能性が高い視覚障害者誘導用ブロックや音響信号機（鳴き交わし方式）を開発してきた。その開発は、多様な経歴や生活体験を有する視覚障害者の協力を得て行なわれたが、彼らの残存機能の能力分布は極めて広範囲に亘っていた。また、音源定位の生理学的研究では、全盲対弱視者、早期障害受障者対後期受障者間でパフォーマンスや大脳皮質活動が異なることも示してきた（業績 3、4）。しかし、現在行なわれているこの様な研究のみでは、障害者の有する極く一部の能力しか検討することは出来ない。そのため、障害者の全体像を定性的に捉え、能力発達の可能性と限界に関する示唆を得るには、今回提案する類の質的調査が有効と考えられる。そのようなアプローチは現在国内外においてほとんど見られない状況である。

２．研究の目的（序論）

現代社会において課題とされる障害、性差、人種等々の様々な差別が社会的に解決すべき問題として議論されるようになったのは非常に歴史が浅く、第二次世界大戦後の 20 世紀後半にその源流が求められる。それ以前の社会には、宗教等と関連する慈悲の概念からの生活援助（主に経済的援助）が主であり、身体・心理リハビリテーション、障害児教育、職業リハ、社会参加等の考え方は概ね皆無と言っても良い状態であった。

そのように比較的短い歴史の中で、障害者の自立性、自在性、人格に対して低い評価が一般的であった社会通念は大きく変化し、障害の再評価と社会への取り込みが現代社会における国家の一つの目標と見なされるようにはなってきた。しかしながら、障害の多様な種類と構造を通じて質の高い支援を展開するためには、高い専門性やシステムの存在が求められる。

わが国では、 2013 年度末になって他国に大きく後れを取って国連の「障害者の権利に関する条約」を批准し、2014 年に承認されことにもみられるように、システム整備、専門家の育成と維持と技能向上、障害観の高水準化の何れの水準においても世界をリードする様な状況に至っていないのが現実である。障害は多様であり、その支援の実施に当たっては障害構造、障害の程度、受障時期、生活環境等々の要素が考慮されなければならない。日本の福祉システムは公助中心であったため、自助に加え民助（民間；NPO、ボランティア等コミュニティの資源）、共助（障害者及び密接な支援者）等のセ支援クターの発達は限定されて、発展途上の位置づけとみなされる。

本研究はこの様な状況に置かれているわが国の障害者の中でも、情報障害や移動障害等によって、社会参加の流れから孤立する傾向の強い視覚障害を取り上げることにした。視覚障害を有している障害者の中でも、特に早期障害の場合にはエコロケーション、優れた記銘力、要約力等が際立っている場合が多いばかりでなく、好奇心やモチベーションが極

めて高い場合が往々に認められる。中途障害に（後期障害）関しては、乗り越えるべき過程が早期障害に比べて多くなる傾向があり、また異なる受障年齢や性別、経験等を指標に対処する方法論が確立していない現状である。上述したように、様々な差異が単一の障害において存在していることが視覚障害の理解を妨げている側面がある。それは延いては、社会への障害者の組み込みを阻害する要因となり得る。本研究では、この様な現状に鑑み、早期障害で現在一定の成功をおさめている者、また今その努力過程にある者からの聞き取りを行い、その成功やそれへの過程において必要性の高いものを明らかにすることを試みた。そこから得られた知見を基に、中途障害の者における成功例も取り上げ、その差異を明らかにすることを試みた。この様な検討から早期、後期受障を問わずに、必要とされる共通の要素を抽出し、それぞれに関する支援目標を設定することを課題とした。

３．研究の方法

視覚障害者に対する調査は主にインタビューによる方法を用いて行った。調査票を予め準備し、基本的にはそれに沿ってインタビューを進めることとした。インタビューを実施した対象者は、国内 10 名、国外 3 名（米国）であった。その内、国内は早期障害が 6 名、後期障害（高校前後）4 名であった。障害の程度は、全盲、準盲とした。国外は早期障害が 2 名であった。調査項目は、①一般属性（年齢、家族構成、教育、職業）と②障害受障時期、障害程度とその変遷、障害リハビリテーション）③活動状況（日常生活、職業、ADL、IADL、交通機関等の利用）、④社会参加、⑤生活満足の程度等とした。この様なことに加え、⑥自己が確立した能力、⑦挫折体験（人生体験）、⑧最も影響を受けた事柄、⑨信念、⑩支援の状況と経緯等についても調査した。記録は許可を得て Digital Voice Recorder に収め、それを質的分析に用いた。

４.研究成果

4.1　早期障害者における特徴

全盲者に対するインタビューを実施した結果、多くのものがすぐれた移動能力や学術やアートに関する能力を有していたが、一般属性には特に関連する要素は存在せず、また多くの場合は当事者も特別なターニングポイントになる出来事があったとは意識していなかった。当然多くの対象者が健常者の世界と関わる際に何らかの困難に直面していたが、それを特別な出来事とはみなしていない傾向があった。この様な傾向が多いのは極めて興味深い事であるため、その背景にあるものが何かについて糺すことを試みたが、共通していたのは家族（特に親）の子（当事者）に寄せる信頼、共感、励まし等が最も影響力の大きい要素として抽出された。また、教育を受ける段階においては、教師の理解と支援が得られていたことが、有効な要素として見出された。一方、教育を受ける過程では同じ障害を有する友人を持つことが社会の理解とそこへの自己の位置付において重要な役割を果たしていることが示された。公的な支援に関しては、移動のリハビリテーションや教材の取得等に役に立っていたことが分った。

4．2　後期障害における特徴

人生の中途で障害を負った場合は、その受障時期によって、その後の能力獲得状況においても、また社会復帰の水準においても差異が認められた。比較的早い時期に受障した場合は、早期障害に似て家族による援助の要素が大きかったが、高い年齢になるほど、能動的に支援を求めない場合は障害や社会への対処に苦慮する傾向が認められた。そこには公的支援、社会的支援の欠如の問題があるとみなされた。そのような障壁は、支援者や同じ後期受障の人との出会いを作る、ピアカウンセリングを受ける等のきっかけが有効であることが示され、コミュニティにおける資源の存在の重要性が窺われた。中途障害においては、励ましや、将来の可能性に関するポジティブな情報提供によってモチベーション増大を図る必要性があり、良い環境が提供された場合は早期障害ほどの達成度に至らないものの、それに準じる能力を発揮していることが分かった。

4．3　国内と国内調査の差異

本研究における国外調査は米国おいて実施した。対象者は大学教員、社会人と大学院学生各 1 名であった。全員早期障害であった。学生は、現在研究を行っているが、指導教員（協同研究者）が非常に熱心で、データの可視化（触覚）によってその共有と意思の疎通を図っていた。全てに共通して言えることは、家族支援、公的支援、コミュニティの支援の全てに特段の不満を持っていないことであった。全てに共通していたのは、非常に強い家族の支援であった。後期障害者がどの様な状況にあるかは興味深い問題である。

4．4　まとめ
今回の調査研究における当初の目的は、ライフサイクルの種々の過程において、モチベーションを保ち、様々な困難を乗り越えて健常者と同等の水準やそれを凌駕する力を発揮する視覚障害者の能力がどの様に開発されるのかを知ることであった。今回の調査結果の傾向を見ると、家族支援、コミュニティ支援の重要性が示された。また公的支援については、経済的支援、専門的支援（人的、物的）及びコミュニティ支援の仲介等に重要な役割を担うであろうことが推測された。特に日本においては公的支援における専門的支援及びコミュニティにおける民間支援の充実を図ることが今後の視覚障害者支援に重要であると考えられた。本研究の結果、家族支援、コミュニティ支援、公的支援の三者の存在と充実及びその連携の観点から検討を進める必要性が示唆された。

５。主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　3
件）
①Masaki Tauchi, Ayumi Nobuhara, Keiko Ogawa, Yoichi Sawada, Takabun Nakamura: The effect of sound localization skill on orientation and mobility, AER2012 International Conference, Bellevue, 2012

②Masaki Tauchi, Takabun Nakamura, Yoichi Sawada, Sound localizability of visually impaired and the effect of feedback training on accuracy improvement, Annual meeting of Society for Neuroscience, San Diego, 2013

③Masaki Tauchi: Various Means to Assist with Safe and Quick Street Crossings for the Visually Impaired Pedestrians, AER international Orientation and Mobility Conference, New Orleans, 2013

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田内雅規（岡山県立大学）

研究者番号：00075425

(2)研究分担者
河田正興（川崎医療福祉大学）

研究者番号： 70461241

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：